

実践女子大学図書館蔵 下田歌子自筆日記について (一)

書誌および明治二十一年の概要

愛甲晴美

はじめに

実践女子大学図書館には、以下に示す下田歌子の自筆日記が保管されている。

- ① 明治二十一年十月一日～十二月三十一日（下田歌子関係資料 請求番号三〇）
- ② 明治二十二年一月～十二月（同、三二）
- ③ 明治二十三年一月～十二月（同、三三）
- ④ 明治二十四年一月～十二月（同、三三）

これらの日記はほぼ毎日付けられたもので、かなりの分量があるが、いまだ詳細な調査は行われていない。だがこの時期、下田

歌子（以下下田）は華族女学校学監として多忙を極めており、当時の動向を知るための重要な資料といえる。

今回はまず①～④の書誌を記す。次に、①の主要事項を概観する。さらに、この間の家庭内の事柄に関する記述を確認することで、下田の家族の動向を見ていく。

1. 書誌について

まず、四点の書誌を記す。

凡例

一 資料名下に（ ）を用いて請求番号を示した。

一 虫損等で判読できなかった文字には□を付した。

① 日記 (三〇)

表紙 後表紙 縦二十八・〇糎×横十五・五糎

左肩に白地題簽貼付 題字「日記 明治二十一年」

表紙、題簽とも、当時の図書館の担当者によって後補された(四点とも同様)

原本共紙表紙 題字「明治廿一年十月一日より／日記／

下田歌子」と墨書

形態 袋綴(六孔 麻糸)一冊

料紙 片面野紙(無界) 藍刷り 枠 縦十七・三糎×横十二・八

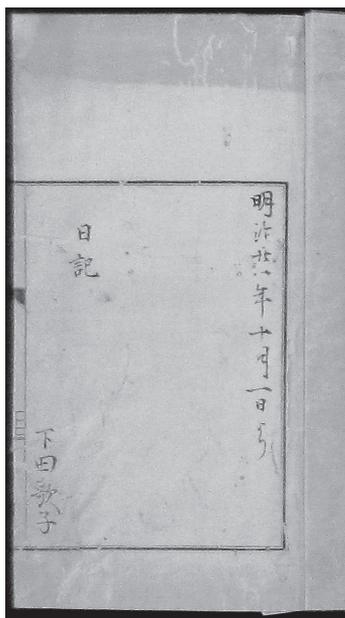
糎(虫食補修済み)

構成 三十丁 丁付なし

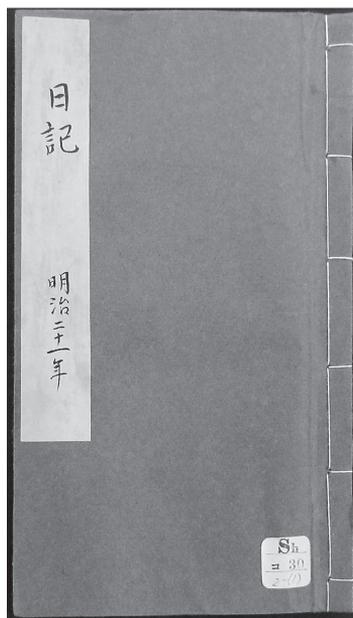
本文 墨書

印記 実践女子大学図書館印、下田歌子資料、請求番号

備考 本文 十二月三十一日のみ内容記述なし



① 第一丁表



① 後表紙

② 日記 (三二)

表紙 後表紙 縦二十五・〇糎×横十六・五糎

左肩に白地題簽貼付 題字「日記 明治二十二年」

原本共紙表紙 題字「明治二十二年」一月／日記」と墨書

形態 袋綴(五孔 麻糸)一冊

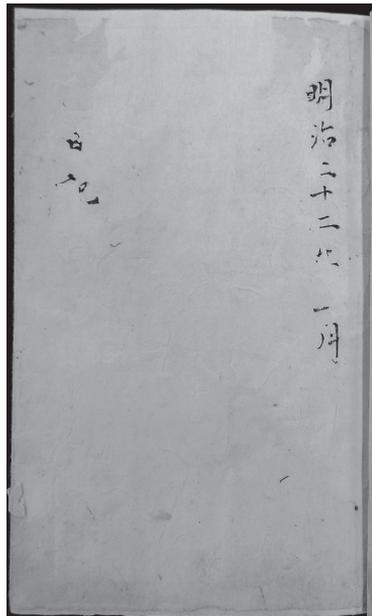
料紙 楮紙(虫食補修済み)

構成 五十一丁 丁付 表面の綴穴近くに鉛筆書き 後綴の際

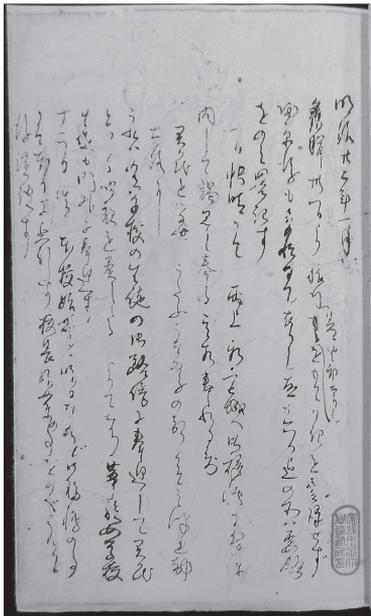
記入か

本文 墨書

印記 実践女子大学図書館印、下田歌子資料、請求番号



② 第一丁表



② 第二丁表

③ 日記 (三二)

表紙 後表紙 縦二六・七糎×横一九・二糎

左肩に白地題簽貼付 題字「日記 明治二十三年」

原本共紙表紙 題字「明治廿三年一月ヨリ／日記／香雪

女史」と墨書

形態 単葉装(六孔 麻糸) 一冊

料紙 両面野紙(有界) 十三行 茶刷り 枠 縦二十一・四糎

×横十六・〇糎 版心中央で切断して使用か(虫食補修 済み)

構成 墨付本文五十三丁 後遊紙四丁 丁付なし

本文 墨書

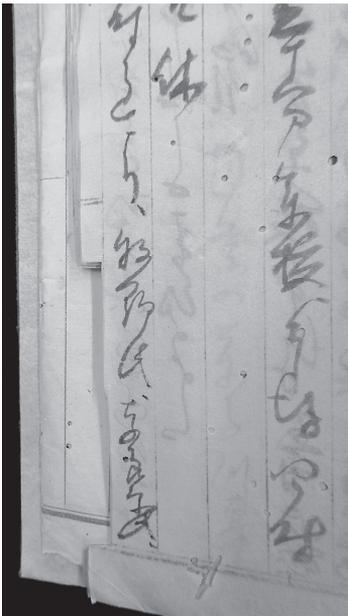
印記 実践女子大学図書館印、下田歌子資料、請求番号

備考 共紙表紙の裏に自筆と思われる墨書二行あり、裏打ちのため不鮮明

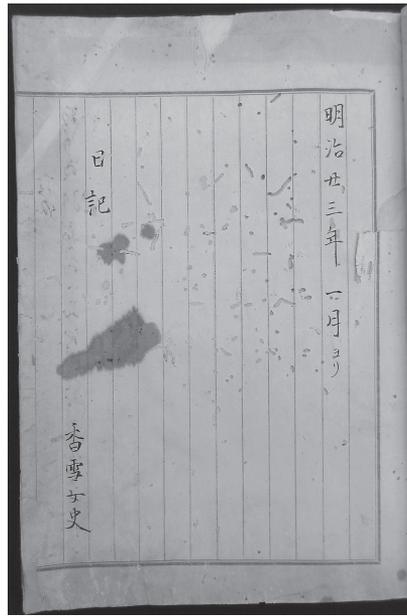
本文第四十七丁裏は鉛筆書きで日課表 墨で四方括弧書き、上部に墨横線一本

後遊紙第三丁裏に鉛筆書きで日程表 上から墨で抹消線を引く

第五十丁から五十三丁は、同じ野紙で片面印刷されたものを半切して両面使用し、版心下部に切り取りがある



③ 版心下部



③ 第一丁表

④ 日記 (三三)

表紙 後表紙 縦二十四・二糎×横十五・〇糎

左肩に白地題簽貼付 題字「日記 明治二十四年」

原本共紙表紙 題字「明治廿四年一月ヨリ／日記／香雪」と墨書

形態 袋綴(六孔 麻糸)一冊

料紙 片面野紙(無界) 藍刷り 枠 縦十七・六糎×横十二・七糎

(虫食補修済み)

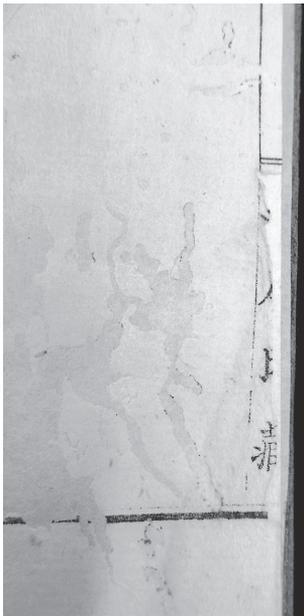
構成 五十三丁 丁付なし

本文 墨書

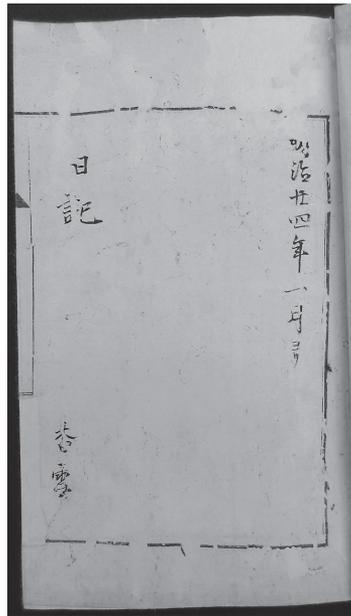
印記 実践女子大学図書館印、下田歌子資料、請求番号

備考 版心下部に切り取りあり。(第二丁版心記載の文字「 氏 藏」を切り取るためか) 上部余白にまれに鉛筆書きあり。後綴の際記入か

版心下部に切り取りあり。(第二丁版心記載の文字「 氏 藏」を切り取るためか) 上部余白にまれに鉛筆書きあり。後綴の際記入か



④ 第一丁版心下部



④ 第一丁表

2. ①(明治二十一年十月一日〜十二月三十一日)の概要

本文は月日、曜日、天候から起筆している。ほぼ毎日、起床、出校、退校、来訪や訪問、帰宅、就寝等の時間をおおよそ時系列で記し、来訪者や訪問先の氏名や所用の内容をごく簡潔に書き留めている。時間は五分単位まで書かれている場合もある。人物名は、頻繁に記される場合には名字か名前のみというものも見られるが、大方は後で人物がわかるように姓名、あるいは役職、尊称等を付して記されている。個人的な感想や随想といったものは殆ど見られない。

姪の平尾寿子が、「八十余年の生涯中、一日も欠かさずつけた日記」と書いているが、日々の記録を欠かさなかった、下田の几帳面な性格を本資料からも垣間見ることができると言える。主だった事項を次に示す。

- 十月 二日 皇女御降誕の祝賀を啓す(明治天皇第六皇女
つねみやまき) 常宮昌子内親王 九月三十日生)
- 四日 大坂相愛女学校主 松原氏来訪 学校参観²
- 十七日 神嘗祭 諸払いする
- 二十一日 三島通庸氏危篤の報を受け訪問
- 二十三日 三島氏死去³

十一月 三日 天長節 大臣、親任官、公侯爵 高等官らに生徒の歌、演奏を披露⁴

六日 よし子(堀江善子)とともに、サラザン氏にフランス語を習い始める⁵

十二日 昭宮殿薨去(明治天皇第四皇子昭宮猷仁親王)⁶

(翌日十三日は華族女学校の開校記念日で式典を予定していたが中止)⁶

二十三日 新嘗祭 塾生一同と団子坂の菊人形館に行く⁷

二十六日 皇后行啓 天長節同様の歌、演奏等を披露⁸

十二月十三日 華族女学校生徒をつれて宮城拝観

二十四日 煤払い、餅つき 塾の稽古じまい

三十日 門松を立てる

日記には、ほぼ毎日複数の来訪者の名前がある。特に下田の歌の師であり、平尾一家が岩村から東京へ移転した際、一時寄宿させてもらった高崎正風や、その従兄弟で東京府知事の高崎五六は、頻繁に行き来している。五六は当時娘の芳子よしこを華族女学校に通わせており、保護者の立場でも下田と度々面談している。その他にも桃夭塾、華族女学校の生徒や保護者、教職員のほか、歌人、僧侶など様々な人物に対応する様子が記されている。また、自らも

土方久元宮内大臣、伊藤博文枢密院議長、松方正義大蔵大臣、大隈重信外務大臣等の政府高官や、山階宮家、有栖川宮家など諸所を訪問している。さらに、書状のやりとりも多い。多忙によるものか、何度も体調を崩し、往診を受け、眼病や歯の治療で医者通いもしている。

十月二日にふれられている常宮昌子内親王と、第七皇女周宮^{かねのみる}房子内親王^{ふさぎ}には、下田が欧米女子教育視察を経て、御用掛として教育に当たることになる。両内親王は下田を生涯の師と仰ぎ、臨終の床にまで駆けつけるほど関わりが深かった。

同年五月から七月にかけて、前年から患っている気管支炎が快癒しないため、療養も兼ねて名古屋京阪方面に旅行しているが、日記の冒頭にも気管支炎が全快しないことが記され、長期間悩まされていたようだ。この旅行中に知り合った、大坂相愛女学校校主の松原深諦が学校参観に訪れている。

十月二十三日に死去した警視総監三島通庸^{みちつね}との交流は深く、危篤の姿に耐えがたく、下田は屏風の陰に隠れたと記している。日記の他の箇所にはあまり記されないこうした心情が綴られるのも、下田にとって大切な協力者であった人物を失うことに対する、深い悲しみの顯れといえよう。

十一月三日の天長節、同二十六日の皇后の行啓は、学校を挙げたの行事となっている様子が記される。下田は宮中へしばしば参

内しており、皇室との関わりの深さがうかがわれる。年末には歳暮のやりとりも記され、みかん、缶詰、鯉節といった、当時の贈答品を知る上でも興味深い。

フランス語をサラザン氏に習い始めたことについても記されている。今回の調査で、その具体的な年月日や経緯が明らかになったので、特に取り上げる。

凡例

- 一 旧字体は新字体に改めて表記した。
- 一 句読点はできる限り原文通り表記した。
- 一 虫損等で判読できなかった文字には、□を付した。
- 一 翻字は山口典子氏による翻字原稿を参照し、愛甲が作成した。

(翻字) (十一月六日)

(前文略)

日よし子を、仏人、サラザンの宅へ遣す□

但し、昨年より、病氣平癒の上ハ、仏語の教授を頼まんと、約したれば、猶、心のいとまなき

様なれど、何時迄、延引^せんよしもなければ、

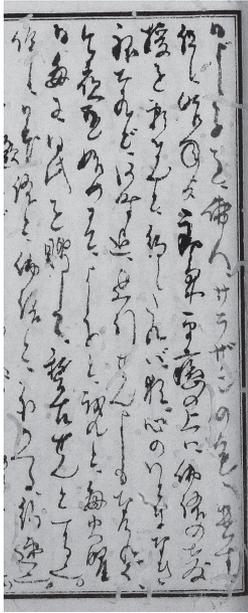
今夜^から始めにて、よし子と我れと、毎火曜

日毎に、同氏を聘して、稽古せんとする也。
但し、日本語と、仏語と、取かへる、約速也、

(後文略)

『下田歌子先生伝』には、「かつての日、宮中にありし頃、仏人サラゼン氏について仏蘭西語は若干学んだ」とあるが、明治二十一年十一月六日より前に、すでに教授を受けていたものを再開したのかどうかは、この記述では判断が付かない。日記には熱心にフランス語の学習に取り組んでいる様子も記され、忙しい中でも自ら学ぶことに意欲的だった下田の姿勢をうかがい知ることができる。

日記は虫損等により、全体を通して解読が困難な箇所が多く、特に第二十七丁以降は欠損が甚だしい。それゆえ、年末には人の往来も多いが、人物の特定や出来事の経緯が、明らかにできない



① 第十四丁表

部分が多数ある。今後の調査により、断片的で解明できなかった部分に関連する情報が得られることを期待したい。

3. 家庭内の事柄について

日記の大半は公務、交友関係に関わる記述だが、その中に下田の家庭内の事柄に関わる事項が散見する。家庭内の用件には、「家事」という言葉を補足することが多く、詳しい内容は殆ど記されていない。記述はおおよそ次のようになる。

十月 九日 田副氏、会沢氏来訪、父より内々の相談のため呼ぶ

二十四日 太田氏来訪、家事の話

二十五日 太田俊光氏来訪、家事について

二十九日 北溟氏、中島氏学校に来訪、家事について

十一月 六日 菊元、母と錦蔵の荷物を取りに来る

十五日 明石氏、母のことで相談、父にも相談する

三十日 田副氏来訪、家事について

十二月 三日 田副氏来訪、家事について。夜、上代氏、下田の千葉県への貫属替の印を取りに来る

九日 田副氏、錦蔵の書状を持参

十五日 田副氏来訪、家事について

十八日 菊元来訪、戸籍のこと

十九日 上代平左衛門より書状が来る。下田の相続人として同氏の親戚稗田哲斎の次男廉亮という男子についての記述

十一月六日には、菊元という人物が母と弟銚蔵の荷物を取りに来たという記述がある。この記述に関連して、父平尾銚蔵の複数の資料に、明治二十一年九月に母房子が平尾家を出たこと、およびその経緯が記されている。銚蔵は、その理由を「巳ムヲ得ザル縁由相生ジ」と記し、その経緯については、銚蔵が房子の行状に不満を持ち、指摘を受けた房子は自ら申し出て家を出たということが読み取れる。¹¹後に、平民新聞に「妖婦下田歌子」が連載され、その中でも母と弟が家を出たことが取り上げられている。この記事内容は、銚蔵の記述とは異なるが、平尾夫妻の別居は周知の事実だったのである。¹²日記の菊元は、銚蔵の覚書にある、菊本と同一人物と思われる。覚書には、同年九月二十七日、菊本を呼び、房子との離縁の届を出すよう催促したとある。平尾家との関係は書かれていないが、親族か、執事のような人物であろうか。¹³十一月六日の一文は、この別居を裏付ける資料の一つと考えられる。翌明治二十二年一月二十二日の日記にも、下婢せきが房子の手紙

を持参し、調度を持ち帰ったと記されている。田副、明石といった親戚と思われる人物が何度も歌子を訪れているが、忙しい公務の中、時間を割いて面会し相談している様子から、差し迫った問題が起きていたと想像できる。¹⁴

房子は明治二十一年、前述の下田の旅に同行し、旅先から銚蔵宛てに書簡を出しているが、そこに夫婦の不和は感じられない。¹⁵これほどの事態を招いた根本的な原因は、銚蔵の記述によっても明らかになったとは言い難い。

その他名前が記されている人物のうち、中島氏は下田が当分の間執事代理を委託した人物であることが、日記の記述からわかる。会沢氏、太田氏、北溟氏については、下田の家庭内の事柄との関わりを、今後も調査していく。

日記では、弟銚蔵も一緒に家を出たようにも受けとれる。銚蔵については、明治十一年に銚蔵から銚蔵へ、平尾家の家督相続願が東京府知事宛てに出されている。銚蔵は明治八年に宮中に出仕したが、同十六年に辞し、その後事業を興すが失敗を繰り返していた。下田著『国文小学読本』や下田編『和文教科書』の一部、さらに三島通庸著『国のすがた』の出版人が銚蔵となっていることから、弟の生計のために下田が尽力していたこともわかる。同二十一年五月には日本漁網会社を立ち上げているが、この事業も成功しなかったようだ。¹⁶

日記には、下田家の相続に関する事柄も記されている。夫下田猛雄が明治十七年五月に亡くなり、すでに四年が経過した明治二十一年になって、ようやく相続人の話が進んだことになる。下田歌子の戸籍謄本（取得年月日不明）には、前戸主として下田廉亮の記載がある。戸籍には相続の理由が書かれていないが、一度は下田家を相続した下田廉亮という人物が、何らかの理由で相続できなくなり、下田が相続したということがわかる。¹⁷⁾

おわりに

明治十八年、四谷区四谷仲町皇宮附属地に、生徒一四三名で開校した華族女学校は、同二十一年十月には、収容人員を大幅に超える二四一名に達し、翌年十月には、麹町区永田町の新校舎に移転している。学監という立場で複雑な学務に追われる下田は、宮中への参内、政府高官等との社交、帰宅しても桃夭塾生の指導や自身の勉学に励む中、家族の問題も抱え、心労の堪えない困難な状況であつたと想像できる。そのような中でも、常に記録を残し、諸事に備える姿勢に、女子教育への並々な熱意と責任感が伝わる。今後も継続して日記を調査し、この間の下田の動向や記載されている人物等を明らかにしていきたい。

■注

- 1 平尾寿子「伯母下田歌子の思い出」高嶋伊都子／山田富子編『竹のゆかり』河出書房 一九九〇年 二十五頁
- 2 大坂相愛女学校は明治二十一年七月四日開校、初代校長は大谷光尊の妹大谷朴子（なほこ）、校主は松原深諦だつた（相愛学園百年史編纂委員会編『相愛学園百周年記念誌』一九八八年）。
- 3 明治二十一年六月五日付で華族女学校囑託教師となつた、アリス・ペーコンが葬儀の様子を記録している（アリス・ペーコン著 久野明子訳『華族女学校教師の見た明治日本の内側』中央公論社 一九九四年 四十七〜四十九頁。なお、囑託教師就任の年月日は『華族女学校第三年報』自明治二十年八月 至明治二十一年七月 による）。
- 4 『華族女学校第四年報』自明治二十一年八月 至明治二十二年七月 四五頁。『華族女学校教師の見た明治日本の内側』五十五〜五十七頁
- 5 堀江善子は華族女学校開校時に当分雇教師、明治二十一年四月に免職している。日記にはよし子の名が頻繁に記され、内容から、当時下田の側近であつたと考えられる。
- 6 『華族女学校第四年報』四十六頁
- 7 アリス・ペーコンは下田とは別の日に菊人形館を訪れ、その様子を残している（『華族女学校教師の見た明治日本の内側』

六十六頁)。

8 明治神宮監修『昭憲皇太后実録』上 吉川弘文館 二〇一四年
四六七頁

9 実践女子学園八十年史編纂委員会編『実践女子学園八十年史』
一九八一年 三十九頁。また、実践女子大学図書館蔵下田歌子関
係資料(以下下田資料)は三島通庸宛て書簡を多数所蔵している。

10 『下田歌子先生伝』故下田歌子先生傳記編纂所 一九四三年
二四一頁(引用文中の旧字体は新字体に改めて表記した)

11 下田資料「房女別居覚書」(平尾録蔵年譜)、「錦蔵行状につい
て聞書」参照。実際に戸籍を変更したかは不明だが、録蔵は武
久房と旧姓を記している。

12 『妖婦 下田歌子 二十五』『平民新聞』明治四十年三月二十六日
前出「房女別居覚書」

14 田副、明石とも名字のみが記されているため、人物の特定は難
しいが、前出の録蔵資料中にも田副、明石の名が見られる。明
石は、東條琴台の子で録蔵の異母弟にあたる、明石範貞と思わ
れる。範貞は明治十八年には東京に住居があり下田の家族と関
わりがあった(湯浅嘉一編『明石八十年史』明石八十年史刊行
会 一九七四参照)。また、明治四十四年の「下田うた改名願
」に親族として田副としての名がある。下田の祖母貞の姉は田副氏
に嫁いでいる。

15 愛甲晴美「下田歌子の母、平尾房子に関する調査報告2—平尾
房子書簡 夫平尾録蔵宛—」『うた子だより』第3号 実践女
子学園PJ研究 下田歌子研究所 二〇一三年

16 下田資料「日本漁網会社設立一件」。前出「錦蔵行状について
聞書」から、明治二十五年頃には錦蔵の事業がうまくいって
ないことがわかる。

17 下田資料「下田家戸籍謄本」によると、下田が廉亮を養子にし
ていたことがわかる。前出の平民新聞の記事には、下田の戸籍
を写したと思われる記載があり、廉亮のことも書かれている。

(あいこつ・はるみ／実践女子学園下田歌子研究所研究員)